

ファゴット アドバイザー



吉澤 真一

宇都宮市出身。宇都宮短期大学附属高等学校音楽科，東京藝術大学卒業。ファゴットを山畑馨，三田平八郎，アルフレッド・ヘニゲの各氏，室内楽を森正，細野孝興の各氏，演奏法を吉田雅夫氏に師事。音楽全般にわたる教えを故田淵進氏より受ける。

1978年 NHK 洋楽オーディション合格。1982年第51回日本音楽コンクール入選。

ヴィヴァルディ，モーツァルト，ウェーバーの協奏曲，ハイドン，モーツァルトの協奏交響曲を東京ゾリスデン，東京フィルハーモニー管弦楽団等と共演。

1995年，シンガポール「チャーチルホール」にてジョイントリサイタル。

モスクワ放送交響楽団，ポーランド室内管弦楽団の日本ツアーに参加。

NHK FM「午後のリサイタル」，「FMクラシックアワー」，「青少年コンサート」へ，ソリスト，室内楽奏者として出演。

東京シティーフィル管弦楽団を経て，1980年東京フィルハーモニー交響楽団入団。2018年同楽団退団。

現在，宇都宮短期大学音楽科・同附属高等学校音楽科講師，クロイツ音楽院講師，「森の音楽教室」講師。

初演・本邦初演曲

1979年 C・グルディンスキー 「インプレッション」

1988年 鈴木憲夫 「プレリュードとカプリッチョ」

1995年 山田栄二 オペレッタ「不思議の国のアリス」完成版(指揮)

2001年 パガニーニ 「ヴァイオリンとファゴットのための協奏的二重奏曲」

著書

「偉大な作曲家より学ぶ 18 のファゴット練習曲」(2017)

1. 聴いて頂く事

ステージに立つ。器用でない自分にとってこの事は、毎回毎回恐ろしい事だ。

お客様に時間を割いて頂く。暑い中、寒い中、遠路足を運んで頂く、場合によっては、お金を払って頂く。そうされたお客様に充実した時を提供できない自分は万死に値すると恐ろしくなり、演奏前から額が冷たくなるほどの緊張を味わうのである。

そんな自分が唯一恐怖から解放される方法は作品と向き合うことだ。

2. 音を並べる

楽譜を読み、作品のおおよそを知った後、音楽の基本ルール～例えば上行は心のクレッシェンド、下行は逆などごく初歩的な～に添い、作曲家の選んだ1つ1つの音を、超ゆっくり並べ吹いてゆく。

「木を見て森を見ず」と云う格言があるが、逆に木一本一本(音一つ一つ)の生命が、森を(作品を)作っていることを確認するのだ。

3. 創造物の中で最も自然なもの

一音一音の意味を隅々まで聴き取れ理解したなら、テンポを上げてみる。

平面に書かれた楽譜が立体に浮かんでくる。例えば 16 分音符の連続の中に曲線が見える。それは木々が風で揺れるように、川が流れるように、波のうねりのように……。人間が作った最高に自然なものが音楽であることを、思い起こさせる瞬間でもある。

4. 奏者の立ち位置

神—自然・宇宙



作曲家（作品）



奏者



聴衆

奏者と云うのは、作曲家（作品）と聴衆の間で伝道者の役目を担っている。つまり、あくまでも作品に忠実でなくてはいけない。ロシアの偉大なピアノ指導者ネイガウスの掲げるスローガンに「個性を捨てろ！」と云う言葉がある。「えっ、個性は出した方が

いいのでは？」と思われるかもしれない。しかし伝道者は、自分の気分や

解釈で神の声を別の言葉に置き換えることは許されない。ネイガウスは、個性を作為的に出そうとしたとき、その何倍も作品の真価を遠ざけると云うのだ。しかし、忠実に作品に向き合い真髓をとらえられた時、真の個性が滲み出てくるのも不思議な事実だ。—神の領域についても触れたいが、ボロがでるのでやめる—

こういった事がなんとかこなせた時、恐れながらステージに向かえるのだ。

